事例 10 企業がプロボノメンバーを募り NPO との連携を進めている事例
NPO 法人中部プロボノセンター × 大同メタル工業株式会社

① 連携の概要

プロボノとは「各分野の専門家が、仕事で培った知識やスキルを無償提供して社会貢献するボランティア活動全般」または「その活動をする人」を意味する。「大同メタルプロボノプログラム」は、総合すべり軸受メーカーの大同メタル工業株式会社（以下「大同メタル」）が創立 80 周年を契機として、地域社会の課題に取り組んでいる NPO を資金面で助成するとともに、同社の従業員が仕事で培ったスキル、経験等を生かしてプロボノとして支援するもので、2019 年 9 月から始まった。初回は、支援先 NPO を事業所の周辺地域（尾張地区）で活動する団体に絞り、団体募集は中部プロボノセンター（以下「プロボノセンター」）が担当した。名古屋、一宮、犬山で開いた募集説明会には 5 団体が参加。結果、5 団体から応募があり、プレゼン審査等を経て支援先となる 2 団体が決まった。支援に入るプロボノメンバーは社内で公募され、プロボノセンターの事前研修を受けた上で、9 月～2 月の 6 か月間、NPO と共に活動した。2019 年度は 13 名が 2 チームに分かれて活動。2020 年度はプロボノメンバー6 名に加え、2019 年度のメンバー5 名がアドバイザーとして入り、新たに 2 団体の支援を始めている。

② 連携のきっかけ

2017 年 1 月、大同メタルでは、創立 80 周年に向けて記念イベントを企画するチームや周年誌を作るチームなどが、部署をまたぐ形で発足した。その時、濱島さんと木村さんが担当したのが地域・社会貢献チームだった。それまで会社として、寄付や物品の寄贈をすることはあったが、自分たちが動いて、直接支援することはあまりなく、そういう風土を作っていきたいと考えてのことだ。チーム内で、どんな活動を進めていくかを話し合った際、メンバーから出た様々なアイデアのひとつが、地元 NPO 団体を支援するという企画だった。その後、プロボノセンター代表の戸成司朗さんと出会う機会があり、取組内容、支援先の団体数や募集地域などを相談し、プログラムを作った。

費用が掛かるプログラムであり、プロボノセンターに業務委託をすることになるため、実施にあたり業務委託が必要だということを、濱島さんが大同メタル役員に説明し、承認を得る必要があった。そこでプログラム内容を説明するとともに、会社として一緒にやっていく NPO を選考するスキルはまだ自社にはないこと、また、そもそも NPO やプロボノ活動について知らないことが多く、確実に進めていくためには、レクチャーをしてもらう必要もあるということで、2019 年度の実施につき承認を得た。

③ それぞれの役割

プロボノセンターが企画運営の事業委託を受け、NPO に関する情報を持っていない企業と地元の NPO の橋渡し役、プロボノメンバーへの研修、NPO 向けの募集説明会、NPO の選考、連絡調整などを担う。支援先

NPO は大同メタル担当者も含めた選考委員会が NPO のプレゼンをもとに決める。

プレゼンにあたっては、自分たちの団体がどんな活動をして、どれぐらいの人が動き、予算はどれくらいかということがわかる資料を作り、選考委員にそこをしっかりと知らせた上で、活動への思いを伝えるようにプロボノセンターが NPO にアドバイスをする。プロボノメンバーの募集やコーディネートは大同メタルが担当する。ポスターや社内ポータルサイトなどで募集し、説明会も開く。Q&A も作り、Q&A にはプログラムの目的だけではなく、「プロボノ活動は就業時間中にやるものですか？－就業時間外での活動になりますので、基本的には平日の就業時間終了後、または休日になります」など、細かい項目も入れた。2019 年度は説明会を開いても 5～6 人しか参加がなく、なかなか人数が集まらなかったため、個別に声掛けをした。その結果、何とか目標の 12 人以上が集まり、プログラムを実施することができた。

プログラムが動き始めると、プロボノセンターは最初の合同研修、中間報告と最終報告の機会を作り、支援先 NPO や大同メタル担当者とのやりとりはするが、各 NPO への支援活動は基本的にプロボノメンバーが主体となり進めていく。そのため、事前研修にはプロボノ入門、マーケティング手法の演習の他、企業人が NPO を支援するにあたっての心構えなどを取り入れている。「プロボノ活動や NPO についての知識もそうだが、コミュニケーションや心の持ち方についてのレクチャーもありがたかった」と、濱島さんは話す。

④ 連携の成果

プロボノの成果を数値化するのは難しいが、「プロボノを経験した会社では、従業員がプロボノに関わったことによって、仕事に対しても見方が広がり、成長していると感じてくれている」とプロボノセンターの大須賀さん。プロボノメンバーを受け入れた NPO も、自分たちにはない発想をもらい、考え方が広がったと話す。濱島さんは、NPO の役に立てることにやりがいを感じるだけでなく、いろいろ経験させてもらい、自身も成長させてもらったと言う。また、NPO の活動は地域課題の現れであり、プロボノ活動を通して NPO を支援することで、間接的に社会課題の解決に貢献できると感じたそうだ。通常業務の中で直接的な取組ができなくても、NPO と共に活動することで、結果的に SDGs のゴール達成にもつながっていく。

CSR 活動や SDGs への取組の一環で NPO との連携を考える企業が、NPO の情報を集めようとしたとき、現状ではどこに行けば情報があるのかがわからず、アクセスできないというケースも多い。今回は、そこにプロボノセンターが関わることで、NPO にとっても企業にとっても非常に有意義なプログラムとなった。だからこそ、当初から濱島さんが周年事業で終わらせずに継続していきたいと考えていた通り、社会貢献活動の一環として「プロボノプロジェクト」を継続することが会社で承認されたのだ。また、プロボノ活動の報告を社内報や社内ポータルに載せ、周知に努めてきた。活動が就業時間外ということもあり、プロボノ活動を浸透させるのはなかなか困難だが、本活動をきっかけに、少しずつでもボランティア活動に積極的に参加するという企業文化を作りあげていけたらと、濱島さんは期待する。

大須賀恵子さん（NPO 法人中部プロボノセンター 事務局長）、濱島正樹さん（大同メタル工業株式会社 コンプライアンスセンター）、木村麻里子さん（大同メタル工業株式会社 経営企画センター）